



基本に立ち返ることで

見えてきたもの

松下 明美

(悠紀会病院・看護婦)

三好さんとの出会いは5年ほど前にさかのぼるのでしょうか。その当時、老人看護の現場では、病気の治療を中心に処置・検査などが優先され、当の患者さんにはベッドに寝かせたままオムツをさせ、結果、褥瘡をつくりだし「忙しい」「人が足りない」「大変だ!」と悲鳴をあげながらその日一日が終わるといった日々を送っていました。いったい誰のための、何のための看護・介護なのかかわからず、ただ漫然と業務をこなすだけだったのです。

そんな折、三好さんの講演を聴く機会に巡りあいました。

病院には医療の専門家も看護の専門家もいるのに、そこに入院すると、すぐにオムツになってしまったお年寄りが、特別養護老人ホームに移ると、どんどんオムツが外れてしまう事実。また、病院でできた「床ずれ」が特養に移るとどんどん軽減してゆく事実。

それまでの私たちは、何かあたりまえのことを忘れ、最新の技術や専門的な知識のみで対応していました。しかし、三好さんの講演のなかで「お年寄りと一緒に座ってご飯を食べ、一緒にあそび、日常のなかで一緒に関わることが大切である」というお年寄りとの関わり方を聴き、私たちのこれまでの看護・介護の姿ではいけない。スタッフ自らが、いま一度、看護・介護の基本に立ち返り、お年寄りが「もう一度、その人らしい生活を送っていただけるようお手伝いできないか」と取り組み始めました。

そして、まずベッドの足を患者さんに合わせて切り、患者さんが生活しやすくしてみました。また、一人の患者さんのケースから「オムツ外し」を実施してみました。その方は時間がかかったものの、寝たきりの状態からポータブルトイレへ移乗できる状態になりました。その時の、患者さんの喜びが、スタッフに喜びとやる気を起こさせてくれました。

また、よりケアの内容を豊かにするために、改めて看護計画の充実を図らなければならぬのではないかと現場スタッフで悩んでいるとき、三好さんの講演のなかで取り上げられた「POSなんて意味がない」という意見に触発され、「じゃあ、お年寄りにとって意味あるプランとはどんなプランなのか」を、みんな考えてみました。

疾患のみならず、生活面にも視点をおいたアセスメントを行い「QOLの拡大」「その人らしさ」を大切にされたケアを実施してゆく看護計画を検討し、やっとなんらかの結果を出せる段階までできました。

私どもの老人看護・介護の現場スタッフにとって、三好さんとの出会いが、看護・介護の基本に立ち返ることの大切さを学び、気づかせてくれたのです。そして、それを実践することで、個々の患者さんの「その人らしい」生活の再構築をお手伝いできることの喜びを知ることができました。